

献辞

2022年3月、人文学部法律経済学科の岩本美砂子教授が定年退職されます。

岩本美砂子教授は、1986年4月に政治学原論担当の講師として赴任されました。創設4年目の若い学部に着任された先生は、その後の36年間の長きにわたり教鞭を振るい、学部、学科そして三重大学の発展に尽力されました。

先生は京都大学法学部を卒業後、名古屋大学大学院法学研究科に進学されました。名古屋大学法学部助手を経て三重大学に赴任され、1987年に助教授に昇任、そして1996年に教授になりました。

先生のご専門は政治学で、主として「フェミニズムと政治」の分野において、日本での新しい研究方法や研究課題を切り拓く役割を果たされました。研究テーマの中心は政治過程における参加の問題にあり、政治学において「女性」が死角となっていることをいち早く指摘し、日本の政治過程においてフェミニズムの介入が十全でないことを追究されました。

政治学の課題として女性を本格的に取り上げた開拓的研究者として学会で高く評価され、広く一般の医療や女性論の書籍論文でも先生の研究成果は取り上げられています。学会は日本政治学会、日本行政学会、そして日本女性学会に所属され、日本政治学会では理事を務められ、日本女性学会でも幹事として活躍されました。

女性と政治についての研究業績を代表する論文が、「女のいない政治過程——日本の55年体制における政策決定を中心に」（『女性学』第5巻、1997年）で、集大成ともいえる著書が『百合子とたか子 女性政治リーダーの運命』（岩波書店、2021年）です。前者は日本の政策決定過程から女性が排除され続けている実態を示し、政党や行政のカルチャーや非公式のルールが問題であることを指摘し変革の努力を呼びかけています。その後20年余の歳月を経て書かれたのが後者で、現代日本社会においてジェンダー不平等の問題は解決されておらず、土井たか子と小池百合子という異質な2人の女性政治家の足跡を追いながら、新しい女性リーダーの出現を希求し、そうした仕組みを作ることの重要性を主張されています。

この本に象徴されますように、先生の研究は現実社会を直視する批判的なまなざしに基づいており、教育および管理運営においてもその真摯な態度は揺るぎなく、多くの信望を集めました。

先生のご尽力に対して、学部を代表して心よりお礼申し上げ、尊敬の念をもってこの論文集を捧げます。

2022年3月

三重大学人文学部長 藤田 伸也

